

小池辰雄先生92歳記念集会 祈祷会

聖名のゆえに

――詩篇第121篇――

1996年2月4日

小池辰雄

地獄が当然 キリストに棄てられても 無者 天国人 聖名のゆえ 棄身の神交 無即無限無
量 神の栄光 祈り

【詩篇121篇】

- 1 われ山にむかいて目をあぐ、わが扶助^{たすけ}はいずこよりきたるや。
- 2 わがたすけは天地^{あめつち}をつくりたまえるエホバよりきたる。
- 3 エホバはなんじの足のうごかざるを容^{ゆる}したまわず、汝をまもるものは微睡^{まじろみ}たもうことなし。
- 4 視よイスラエルを守りたまうものは微睡^{まじろむ}こともなく寝ることもなからん。
- 5 エホバは汝をまもる者なり。エホバはなんじの右手をおおう蔭^{かげ}。
- 6 ひるは日なんじをうたず夜は月なんじを傷^{うた}じ。
- 7 エホバはなんじを守りてもろろの禍害^{わざわい}をまぬかれしめ、またなんじの靈魂^{たましひ}をまもりたまわん。
- 8 エホバは今よりとこしえにいたるまで汝のいづると入るとをまもりたまわん。

●地獄が当然

親鸞は、

「自分は極楽に行くか地獄に行くか分からん。しかし、こんなやつは地獄へ行くのが当然のことだから、どうなつてもいい」

と言った。さすがは親鸞です。大体、信仰はみな

「いかにして救われるか？」

と、救いのことを考える。救いをあまり考えると、これは御利益宗教になる。信仰が

「自分の救いのため」

ということになる。我々もあまり救いのことを考えると、自己本位になる。そして、一般にも

「信仰がなければ救われないぞ」



なんて言っている。私は、

「信仰なんかありません」

と言う。神交わりの「神交」ならいいですけども、「信じ仰ぐ」といつて自分の救いの目安としたような「信仰」というものは、その性格からいうと御利益的になる。神交は自分の救いを問題にしない。

●キリストに棄てられても

詩篇121篇には、

「たすけ」

とか、

「まもり」

とか、

「禍害をまぬかれしめる」

とか書いてある。ヘタすると、この121篇に限りませんが、とにかく救い本位のような読み方になる。パウロは、

「自分はキリストに棄てられても、彼らが救われればいい」

とローマ書9章で言っている。パウロは自分のことを考えてない。人の助けられることを考えている。

「我キリストに在りて真をいい虚偽を言わず、¹我に大なる憂いあることと

心に絶えざる痛みあることを我が良心も聖霊によりて証す。²もし我が兄

弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛われてキリストに棄てらるるも

亦ねがう所なり。」(ロマ9:1-3)

と、さすがはパウロだ。

「自分なんかどうでもいい。ただ彼らが助けられることを願う。彼らのためなら自分はどうでもいい」

と、人のことを思っている。自分のことを思っていない。このパウロの心境はまことに本ものです。これが本当の愛です。本当の愛というのは自分を棄ててかかっている。キリストも、

「己を棄てて我に従え」

と言っている。

「棄てろ、棄てろ」

と書いてある。棄聖^{すてひじり}というのがある。あれも面白い。なんでもかんでも棄ててかかっている。棄身^{すてみ}という言葉がある。

「棄身でやれ」

と、あれも素晴らしい言葉です。棄身でやれば本当のことができる。



神の栄光が現れること、キリストの栄光の現れることが我々の神交の本筋です。

「自分はとうなつたつていいんだ、地獄へ行つたつていいんだ」

と。こういうのが本当の棄身の神交です。棄身というのは素晴らしい言葉だ。何でも棄身でかかれば凄いことができる。我々もそのようにして進んでいきたいと思ひます。

●無者

「信仰をどうすれば、どうなれば救われるか。信仰がどうでないから救われないか」

と、そういうような言い方を普通はやるわけです。もうそんなことは問題でなくなつてしまふ。何もありませんよと。

そういう意味においても、みんな棄ててしまつたから、「無者」だ。何も無い。棄てるものも無くなつてしまつた。

「無者」

とは素晴らしい言葉だ。キリスト自身が無者なんだ。自分を完全に棄ててかかっている。キリストは神さまの他に何も無い。

我々も神・キリストの他は何も無くなつて、神・キリストの栄光があがれば、

「アーメン・ハレルヤー」

ということなんです。そこまで徹することが本当の世界です。武蔵野幕屋の神交の現実はそうなつてどんどん行きたいと思ひます。

私はテレビで一席やりたいくらいだね、本当に。普通の仏教もキリスト教もだめだから。

●天国人

それがマタイ伝の5章にいう「霊が貧しい」ということです。

「霊の貧しい者は恵福なり」

という。それは天国人です。地上は無い。

「天国人」

なんだ。霊が貧しいということが、神一切としてゐることが、それが天国です。その人はなんです。もう棄てるものがなくなつた境地というのは大変な境地だね。

「天国体」

「何もありませんよ」

と、これが無者です。キリストが正にそう言つてゐる。

「父なる神の他はなにも無い」

と。我々も祈るときに、

「キリストのお父さま、キリストの神さま」

と言つて祈る。何も言葉の上の話ではないけれども、気持はそういうことです。キリスト



が「父」と仰っている、その神さまで。漠然と「神」と思っているのではだめです。私たちの神交の対象は、

「キリストの父なる神」です。

「父よ!」

とキリストが祈っている、その神さまで。漠然と「神さま」なんて言っているわけではない。

その神の栄光のために我々は在るので、その他の何ものでもない。そうすると力が逆に来る。そして神の栄光が我々の一人ひとりを通して現れる。神の栄光が現れるから、神を讃美する。なにも自分が救われたからではない。救いを問題にしない。こういうのが本当の真の世界です。そんな気持で行きましょう。

聖書の作者の気持をさらに乗り越えるような読み方ができるわけです。聖書の文字にこだわらない。ルターが、

「聖書はかけらにすぎない」

と言った。

「かけらにあまりこだわるな」

ということですよ。

●聖名のゆえ

詩篇121篇に入ります。

1 われ山にむかいて目をあぐ、わが扶助^{たすけ}はいずこよりきたるや。

2 わがたすけは天地^{あめつち}をつくりたまえるエホバよりきたる。

これは正に「たすけ」が問題になっている。けれども、もし「たすけ」ならば、これは

「聖名のゆえの助け」

です。聖名^{みな}が現れるための助けで自分本位の助けではない。これは詩篇の作者よりか私が言っている現実の方がもっと凄い現実です。

3 エホバはなんじの足のうごかざるを容^{ゆる}したまわず、汝をまもるものは微睡^{まじろみ}たもうことなし。

みなこれは聖名のゆえなんです。「聖名のゆえ」という言葉がないけれども、

「お前の救いのためではないぞ、聖名のゆえだぞ」

ということですよ。詩篇の作者以上の現実、新約的な、パウロ的な凄い現実です。旧約の文句は新約の光で読まないためです。これはいわゆる有難い言葉になっている。

「そういうように守ってくださいるんですか、ありがたいことです」

と。いわゆる「ありがたい」ではだめなんです。みなこれは聖名のゆえなんです。それは



旧約のこの詩篇の現実では読めない。新約の光で読まない。

4 視よイスラエルを守りたもうものは微睡^{まどろむ}こともなく寝ることもなからん。

5 エホバは汝をまもる者なり。エホバはなんじの右手をおおう蔭^{かげ}

6 ひるは日なんじをうたず夜は月なんじを傷^{うた}じ。

「ひるは日なんじをうたず」とは、日射病にならないぞということ。「夜は月なんじをうたじ」というのは、月射病というのがあって、月の光で精神的な異常になるんだそうです。

7 エホバはなんじを守りてもろもろの禍害^{わざわい}をまぬかれしめ、またなんじの靈魂^{たましひ}をまもりたまわん。

8 エホバは今よりとこしえにいたるまで汝のいづると入るとをまもりたまわん。

「まもる、まもる」

と一生懸命に書いてある。だから、

「ありがたい、ありがたい」

になる。ただ「ありがたい」では本当はだめなんだ。旧約のこの現実よりも新約の光でもって全部これは、聖名のゆえにまもるので、聖名が崇められなければ、守られたってしょうがない。そうでないと、これは普通の御利益教になってしまう。

「守られようが棄てられようがどうでも結構です。あなたの聖名さえあがれば」

と、こういうのが本当の「真^{まこと}」(信)の世界だ。

●棄身の神交

ヨーロッパの神学者が、親鸞の信仰をドイツ語に訳したのを見てびっくりしたという。ヨーロッパ人はもつと因果関係的に考えるだろうから。その点では日本人の魂の方が棄身の世界を知っている。それはヨーロッパだって、本当に棄身の人ももちろんいましたよ。あのフランチェスコなんかもそうだ。あれは素晴らしい人だ。日本では、別に信仰の世界ではないけれども、西郷南洲というのは本当に棄身の魂だった。私は南洲という人の偉大さにはとにかく感激するね。吉田松陰も凄い。松陰の言葉に、

「自非讀萬卷之書安得為千秋人

自非輕一己勞安得致兆民安」

(万巻の書を読むに非ざるよりは、いづくぞ千秋の人となるを得んや。

一己の労を軽んずるに非ざるよりは、いづくぞ兆民の安きを致すを得んや)

とある。

「キリストに棄てられても結構だ」

と、このパウロのローマ書9章の言葉は本当に棄身の神交だ。

「人が助けられるためには、こっちはどうなってもよろしい」



と。何でも棄身でかかれれば本当のことができる。

これは詩篇の作者よりも、新約の光で見ないとだめです。神のゆえに神のために、

「キリストの故に、キリストのために」

キリストにあつてなすならば、それは神・キリストの栄光が現れるので、守られようが守られまいがそんなことは問題ではない。それが棄身の神交だ。それが一番凄い。それが本当の宗教的現実です。親鸞の信仰です。あの棄聖も^{すてひじり}そうだ。

●無即無限無量

「物が在つても無きに等しいと、相対的な有無は考えなくて、絶対的な無の世界に入れ」

ということ。そうすると、その世界は逆に無限無量なんです。

「ゼロ＝無限大」

になる。本当の豊かさというのはそういうところにある。そういう気合で進んで行くと、これは楽しくてしょうがない、力が来てしょうがない。聖名を讃美することが生活の基調になる。そして、それが棄身でもって人を救うことになる。人を助けることになる。愛するとは人助けということ。です。

そういう、何もこだわらない無の世界というのは素晴らしい。キリストがそうだった。だから、キリストに神さまの力がもの凄く働く。死人まで甦ってしまふ。これが無者、無限無量者です。

「無者即無限無量者」

です。我々の神交的現実も正に、

「無即無限無量」

という境地でもって進んで行きたいと思えます。

この現実是谁も批判することができない。相対的人間だから、躓いたり転んだりするよ。しかし、その人の本当の姿はそれではない。それだけの自信をもって進めます。そうすると楽でしようがないし、力が来てしようがないし、ありがたくてしようがない。

●神の栄光

「ありがたい」と言っても、御利益的に「ありがたい」と言っているのではない。聖名が崇められることが、神の栄光が現れることがありがたい。そういう角度で詩篇121篇を読むわけです。これは詩篇121篇の旧約の現実を新約の光でおおってしまった読み方です。旧約の世界はまだそれだけの世界だから、新約の光で読まないとだめです。

新約ではパウロのローマ書が素晴らしい。ローマ書9章に、

「我キリストに在りて真^{まこと}をいい



「キリストに在る」から、真を言える。

虚偽を言わず、¹我に大なる憂いあることと心に絶えざる痛みあることを

我が良心も聖霊によりて証す。^{あかし}

「聖霊によりて」ではなく「聖霊に在りて」です。

³もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから^{のろ}詛われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。」(ロマ9:1~3)

凄いな、パウロは。

「棄てられていいんだ」

と、これが本当の霊的な愛です。

聖書は聖霊の光でもって読むと、楽しい本ですよ。聖書ほど楽しい本はない。これは人間の「思想」ではないから。聖書は思想ではない。上からの圧倒的な宣言なんです。その恵みの驚くべき力に対して応えるのが讃美なんです、本当の告白なんです。そういうことで、聖書は、我々は親しんでいきます。

● 祈り

祈ります。

主さま、兄弟姉妹たちの胸にある、隠れたる感謝また讃美の祈りをお聞きください。兄弟姉妹たちと朝から只今にいたるまで、聖霊、聖言の御導きのもとに、御力のもとに我々は導かれ、ここにいたりしました。聖名を讃えたてまつります。どうぞ、我々の日常生活を通してあなたの栄光が現れるように、私たちをお使いくださらんことを願ひ奉ります。私たちの生活の基調は正にそこにあります。私たちは、生活が聖名の讃美として進んで行くことがなりより大切であり、またうれしいことです。

どうぞ、いよいよそのようにお鍛えくださらんことを願ひ奉ります。兄弟姉妹たちのいろいろな具体的な問題も、その角度からあなたが解決くださることを信じて、聖名を讃え奉ります。兄弟姉妹たちの胸にあるそれらの具体的な祈りを、どうぞお聞きくださるよう願ひ奉ります。

心からの感謝と讃美と祈りと、主イエス・キリストの聖名にあつて献げたてまつる。アーメン。

